

埼玉県内の北陸系弥生土器

—池上・小敷田遺跡を中心に—

魚水 環

要旨 弥生時代中期中葉、埼玉県内においては、日本海側の土器形式である小松式土器が小敷田遺跡を中心として散見される。この事実について、現在報告されているものの範囲でその全ての土器の集成を試みた。その結果、北陸北東部の小松式土器の忠実な模倣品は、模倣として忠実に作られるのは弥生中期後半を待たないわずかな期間であり、小松式の要素のみを取り込んだ形へと急激に変化してゆくさまを池上・小敷田北集落を中心として明確に捉えることができた。これは、ごく短期間の限定的なもので終わった交流でありながらも、これをもたらした北陸系小集団が一定の影響力を持っていたことを示している。それは関東平野における農耕の黎明期に関わった技術者集団であったかもしれない。

1. はじめに

埼玉県内には、熊谷市南部を中心として北陸地方の弥生時代中期中葉に盛行した小松式土器に類似する土器が一定量存在している。栗林式土器との共伴関係の中で、その年代観は固まりつつあるが、中期後半を待たずきわめて短期間で衰退してゆく過程については未だ明らかになっていない。

そこで本稿は、まず埼玉県内でこれまでに出土している小松式系統の土器を集成し、その出現と衰退の様相について改めて考察を試みる。

2. 研究史

埼玉県内における小松式系統土器の存在が最初に指摘されたのは1986年の第7回三県シンポジウムの席上のことであったという。池上遺跡出土の壺・甕や、その当時まだ報告書が刊行されていなかった小敷田遺跡の遺物について、小松式とする見解が発表されている（関1986）。

その後、小敷田遺跡報告書（吉田1991）の刊行を経て、小松式土器について本格的に言及している例は少ない。久田正弘は北陸と長野の関係を論じる中で、各地に点在する小松式土器について触れ、北陸系小集団の移住による熊谷での土器生産

を想定している（久田1999）。

また、石川日出志は池上・小敷田遺跡出土資料を3段階に分けて変遷を示す中で、小松式は新しい段階の4区～5区により多いことを指摘し、これについて低地占地型集落にしばしば見られる遠隔地系土器の一種として捉え、稻作農耕社会の開始に際した社会変動の中で拠点集落が担った情報集約機能の一環と結論付けた（石川2001）。

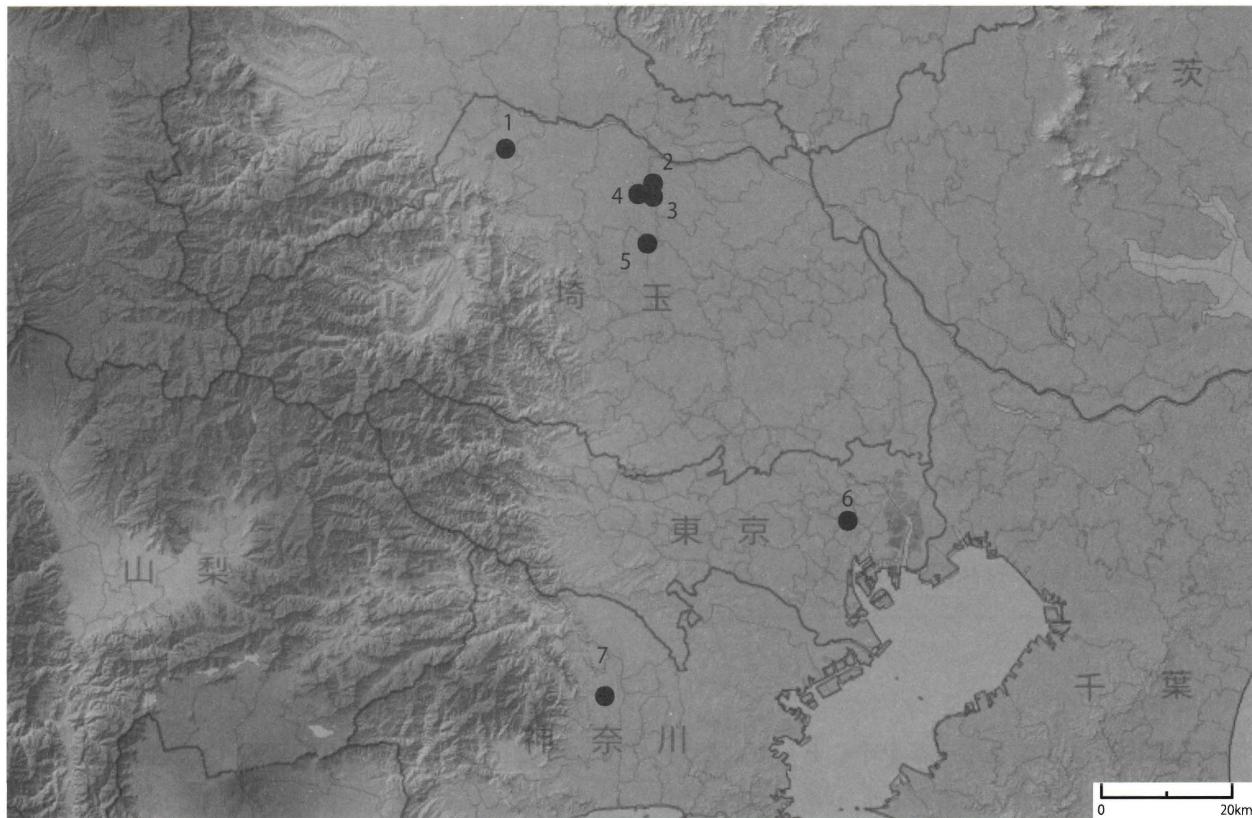
近年では、馬場伸一郎が栗林式土器の分布と編年を検証する中で「北武藏の小松式」について触れ、古宮・池上・小敷田各遺跡の出土品について、その全てが八日市地方様相8期内とし、小松式土器の忠実な模倣品としている（馬場2008）。

3. 小松式系統土器が出土する遺跡（第1図）

実際に小松式系統の土器が出土している事例としては、県内で6遺跡、県外で関東平野に2遺跡があげられる。ここでは各遺跡の環境・立地についてそれぞれ見ていくたい。

（1）村後遺跡（第1図1）（細田ほか1984）

美里町下児玉に所在している。利根川の支流である小山川の右岸に立地する。関東平野の北西縁辺部にあたり、山地が低地と接する境界に存在す



この背景地図等データは国土地理院の電子国土Webシステムから提供されたものである

第1図 小松式系統土器の出土遺跡

1:村後遺跡 2:古宮遺跡 3:池上・小敷田遺跡 4:前中西遺跡 5:円山遺跡 6:小石川町遺跡 7:山ノ上遺跡

る。遺跡の存する、山地から低地へ向かう緩やかな扇状地性台地（本庄台地）は諸河川によって複雑に開析されており、また氾濫などによって遺跡は埋没している。原地形は谷間を望む丘陵上の集落であったとされる。

(2) 池上遺跡・小敷田遺跡・古宮遺跡（第1図2・3）（中島ほか1984）（吉田1991）

熊谷市池上・古宮・行田市小敷田等の一帯、星川右岸の低湿地帯に立地している。現況では荒川と利根川が最も接近する箇所に所在しており、3遺跡は、両河川の度重なる氾濫により形成された広大な沖積層（妻沼低地）の下に埋没している。荒川が形成する熊谷扇状地の末端部に位置しており、地上河川のみならず、伏流水、湧水ともに数多い。小敷田遺跡では水田経営の痕跡が確認されており、この低地一帯では豊かな水資源を背景に、

遅くとも古墳時代から水田が営まれている。

なお池上遺跡・小敷田遺跡は隣接している遺跡であり、近隣に存在する古宮遺跡も含め、全体で一つの弥生時代中期の遺跡を形成していると考えられる。遺跡内の集落分布については、石川が遺構・遺物の分布、また旧河川流路の推定（吉田1991）を基に、北集落と南集落に分割し、変遷を考察している（石川2001 pp.81 第14図）。これに古宮遺跡の範囲および旧河川流路を加筆したものを図2に示した。旧河川を挟むため、古宮遺跡は集落としては池上・小敷田南北の各集落とはまた別個の集落であると考えられる。

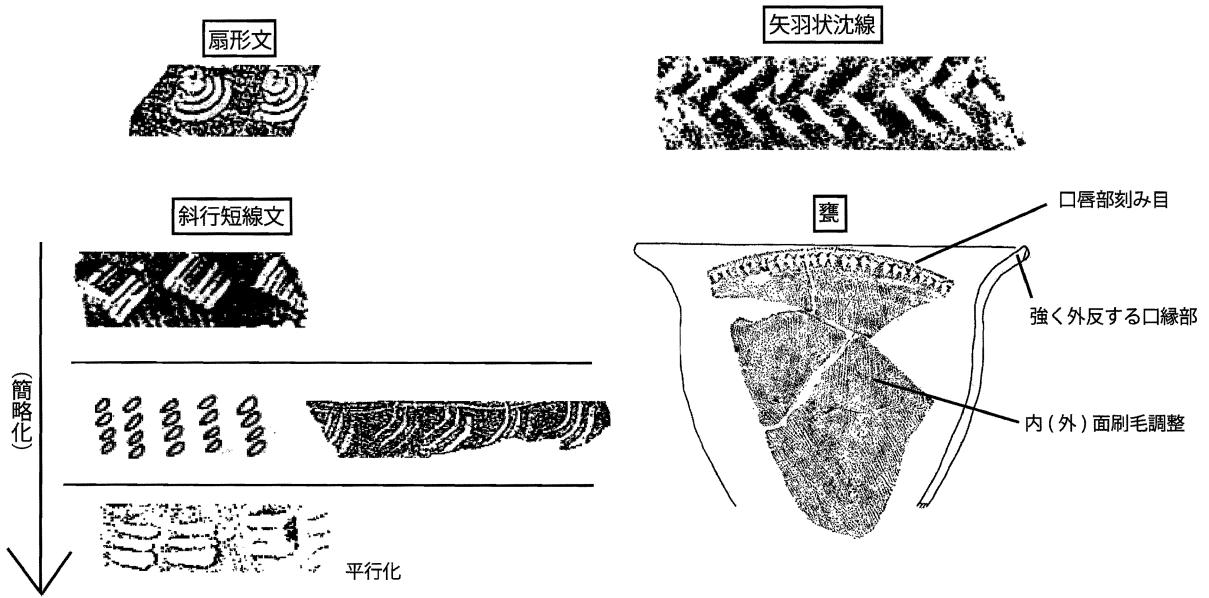
(3) 前中西遺跡（第1図4）（松田2011）

熊谷市中西に所在している。荒川左岸の自然堤防上に立地する。前述の池上・小敷田遺跡から直線距離で4kmほど南西の位置に立地する集落跡で



背景地図等データは国土地理院の電子国土Webシステムから提供されたものである

第2図 池上・小敷田遺跡集落分布図



明確に小松式と認めうる特徴のみを抽出した図であることに留意

第3図 小松式土器判定基準

あるが、小松式系統土器の出土は旧河川跡に堆積した土中からの一点のみである。

(4) 円山遺跡（第1図5）（新井2011）

旧大里町南部、熊谷市箕輪に所在している。吉見丘陵と妻沼低地の境界にある台地から低地を見下ろす場所で営まれた集落跡である。円山遺跡の立地は、山地と低地の境界に位置する微高地の端部という点で村後と共通する。

(5) その他

埼玉県外であるが、東京都文京区の小石川遺跡（第1図6）から小松式土器の壺の胴部片が出土している。遺構に伴う出土ではないが、近隣には千駄木遺跡等もあり中期中葉の遺物として違和感は少ない。加えて、神奈川県厚木市の山ノ上遺跡3号竪穴住居で出土した甕型土器に斜行单線文が見られる。同遺跡は相模川が形成した扇状地（相模平野）の北北西縁辺部に立地している。相模川の支流である萩野川の左岸、萩野台地の南端に立地し、眼下に相模平野を見下すことのできる集落跡である。やはり村後や円山と同様、山地と低地の境界に位置する微高地での立地である。

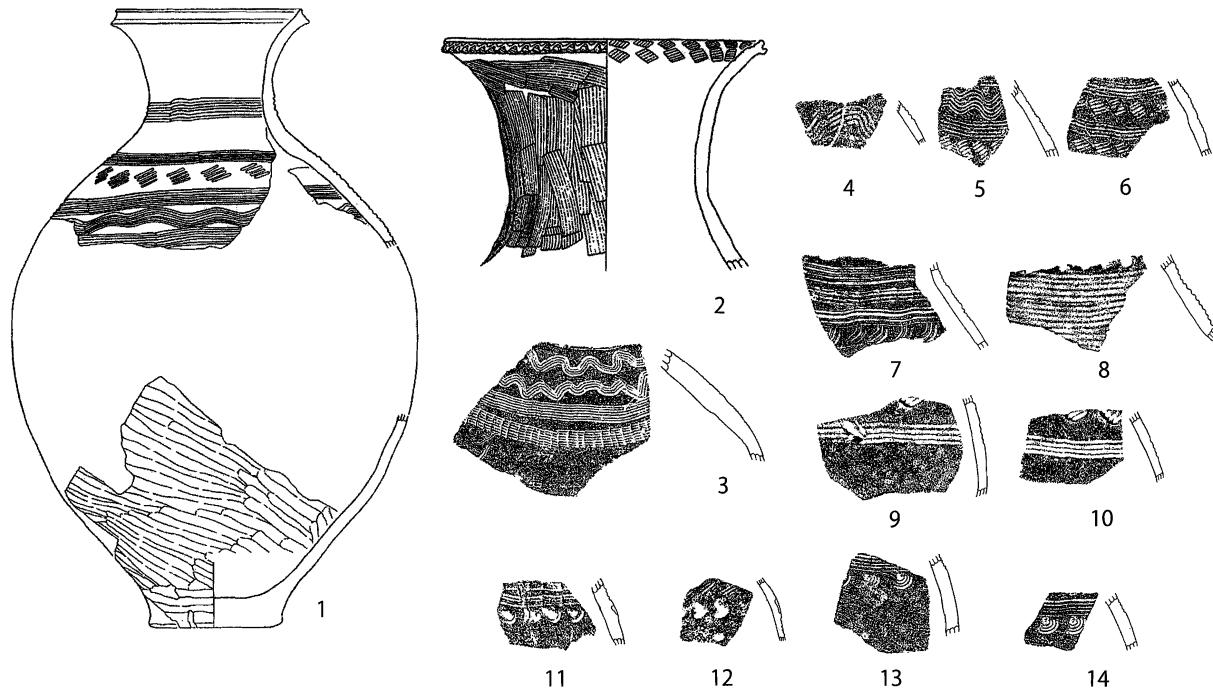
4. 各遺物について

県内における小松式系統土器の出土点数は61点、少なくとも54個体が認められる。なお、土器の判定基準となる文様・器形・調整の各種を第3図に図示した。また、各遺物には北陸の小松式における類例を出来る限り図示している（第9図）。今回の集成では、吹上遺跡を伝播の起点とする馬場の仮説（馬場2008）に則り、模倣元の比較対象として主に吹上・下谷地遺跡などの北陸東部系の小松式土器を用いた。

(1) 古宮遺跡出土遺物

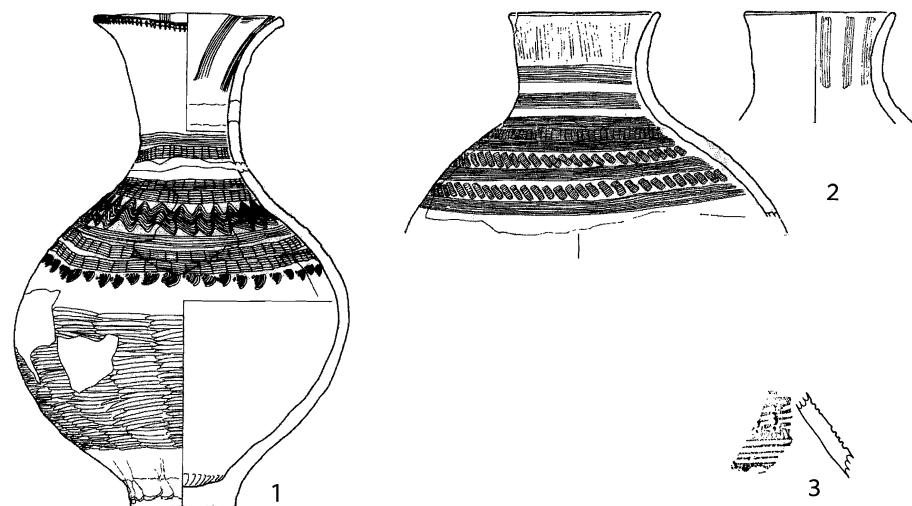
①壺（14点12個体）（第4図）

1は細頸壺である。ラッパ状に強く外反する口縁端部は凹線状に面取りされている。口縁形態は吹上Ⅰ期中～新段階に類例がある（第9図4）。内外の一部に刷毛調整（註1）が残り、胴部は4本1単位の櫛描直線文を3段巡らし、その間上下に斜行短線文と波状文が充填される。2は壺口縁部である。ラッパ状に外反した口縁部の先端に貼付突帯を巡らし、工具で刻みを加えている。1と同様に吹上Ⅰ期中～新段階に類例がある（第9図



第4図 古宮遺跡の小松式系統壺 (S=1:4)

1・3・4・5:古宮グリッド一括 2:古宮14号住居 6・12:古宮SK29 7:古宮SK73 8:古宮SK78
9・10:古宮SK63 11:古宮SK27 13・14:古宮SK30



第5図 池上・小敷田北集落出土の小松式系統壺 (S=1:4)

1:小敷田1号方形周溝墓 2:池上A地区一括 3:小敷田包含層一括

3)。外面に刷毛調整が残り、口縁部内面には4本1単位の斜行短線文が同方向に2段施文されている。1、2の器形、文様とも小松式土器の典型例である。3は（おそらく1と同形の）壺胴部片であろう。4本1単位の櫛描波状文を二段施文し、直線文と廉状文を加えている。胴部上半に櫛描直線文を多段に施し、その間に異なる櫛描文を充填する手法は小松式の八日市地方様相8期に特徴的である。5～10は斜行短線文の壺胴部片である。7の斜行短線文は3本1単位であり、短線がやや屈曲しており、異質である。また、7には刷毛調整が認められる。9・10は同一個体で櫛描直線文の上に斜行短線文を施している。11～14は壺胴部片で胴部下端に扇形文のあるものである。八日市地方様相8期の特徴（福海2003）に忠実である（第9図5、ただしこの器形は貝田町式であることに留意）。13・14は同一個体と思われる。

②甕（2点2個体）（第8図1・2）

1は口縁部が強く外反し、胴部が僅かに張り出す。胴部から底部へは直線的にすぼまる器形である。八日市地方様相8期とされる（馬場2008）。2は口縁部のみであるが、内湾ふうの器形を呈する。口縁部に4本1単位の斜行短線文を3段にわたってやや雑に施文している。文様こそ小松式的であるが、口縁が内湾する甕は小松式土器にない。あるいは在地系の土器に同式の文様を施文したのかもしれない。

（2）池上・小敷田北集落出土遺物

①壺（3点3個体）（第5図）

1は古宮遺跡の2か3と同系の壺であろうか。ラッパ状に強く外反する口縁の内面には垂線文が施されている。壺の上半に櫛描文を充填し、文様帶下端に扇形文を施文する。北集落の終末期に造営された（石川2011）とされる1号方形周溝墓から出土している。2は斜行短線文が存在し、また口縁部に垂線文が残ることから小松式と思われるが、頸部から口縁部はやや短く、口縁部の外反も

弱い。器形の類例は富山県上北島遺跡（荒井2006）出土の壺（第9図2）に求められるだろうか（註2）。3は3区包含層出土のものである。櫛描直線文の上に、おそらく斜行短線文が変化したであろう短線文が施されている。やや厚みがあり、甕片である可能性も残す。

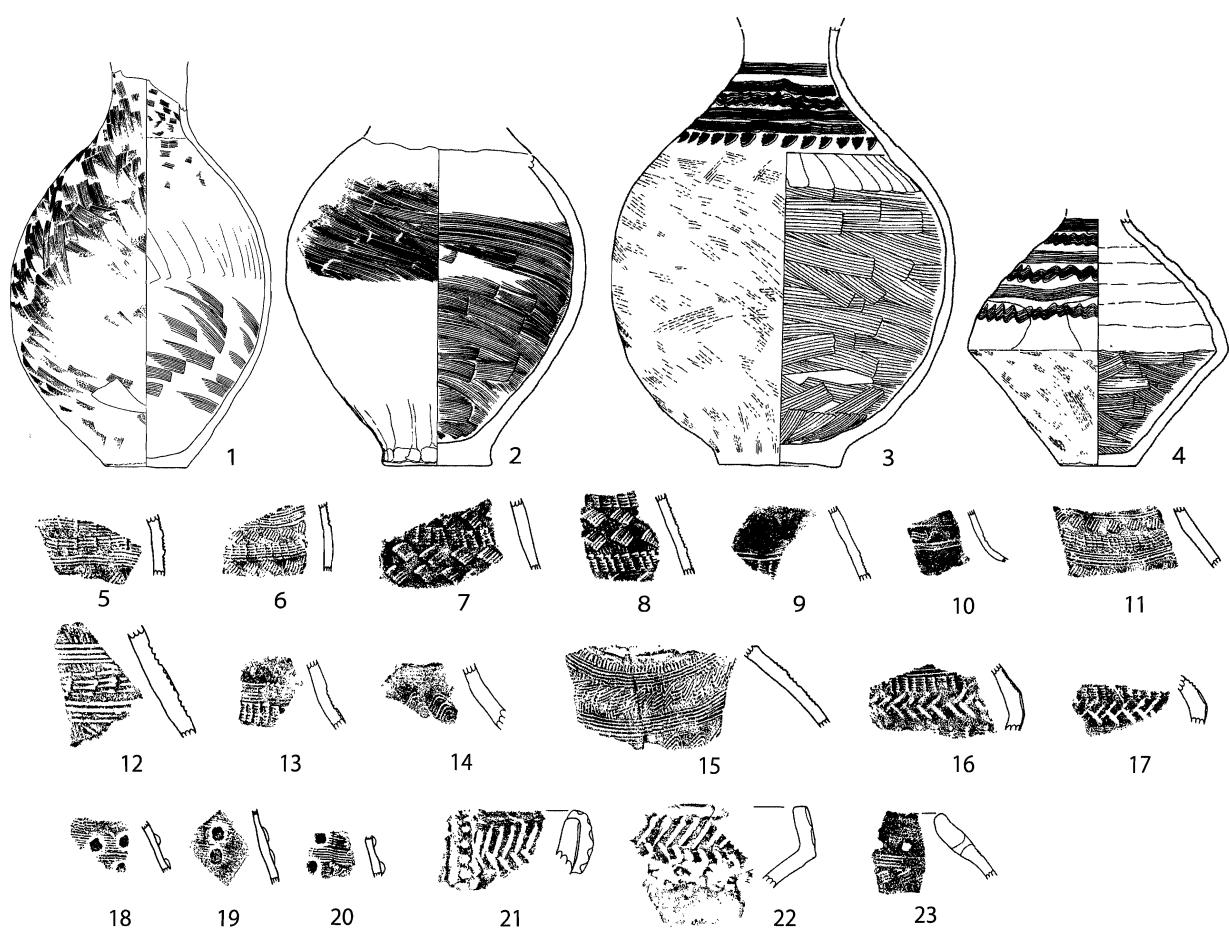
②甕（4点3個体）（第8図3～6）

3・4は同一個体である。無文で口縁が強く外反し、胴部が僅かに張り、口唇部に工具の刻みを施す。内面の刷毛調整もこのタイプの特徴である。吹上I期の新段階に類例がある（第9図8）。5・6には斜行短線文が見られる。5は外面に1段、6は口縁部内面に2段施されている。

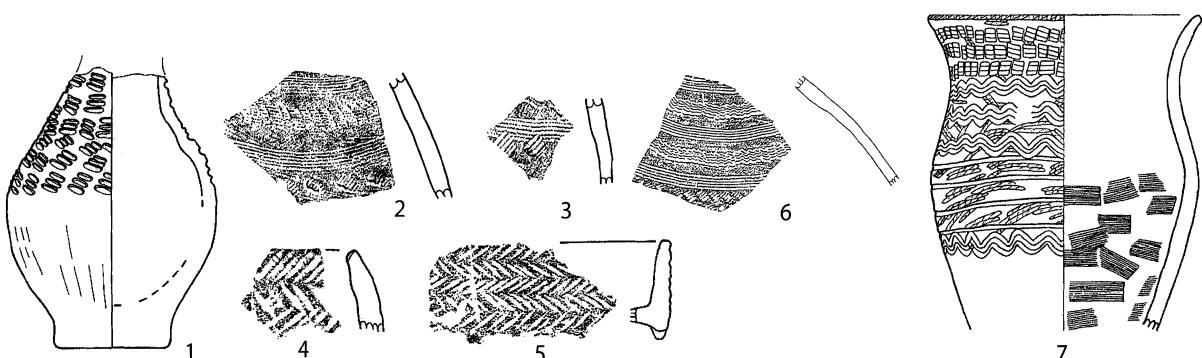
（3）池上・小敷田南集落出土遺物

①壺（23点19個体）（第6図）

1・2は頸部以上を欠損する無文壺で、内外面に刷毛調整が残る。新潟県下谷地遺跡に似た壺が数点ある（高橋他1979図版30：92～95）ほか、先述の富山県上北島遺跡出土の壺（第9図2）も同系と思われる。3は北集落の壺1（第5図1）とほぼ同形である。4の器形は貝田町式とも思えるが、石川県梯川遺跡出土品（橋本1968）によく似たものが存在する（第9図10）。5～12はすべて胴部片で、斜行短線文を持つ。7・8は同一個体である。13～15は櫛描文を持つ頸部片である。16・17は同一個体と思われる胴部片で、廉状文の下に矢羽状沈線を施文している。口縁部の内外面でなく、壺胴部に矢羽状沈線を施す例は少ないが、吹上遺跡で同じ構成の破片が1点出土している（第9図12）。18～20はおそらく同一個体の胴部片で、櫛描直線文に対して、これを無視するように円形浮文を縦列に配置している。鈴木正博はこの円形浮文の発祥に東海～南関東系突起文を引き、また下谷地遺跡等における貝田町式の系譜も受けとる（鈴木2013）が、類例は下谷地遺跡（第9図9）や吹上遺跡（第9図14）、作道遺跡（金三津・松尾2006 第9図13）等北陸各地に挙げら



第6図 小敷田南集落出土の小松式系統壺（1のみ S=1/8 ほか S=1/4）
 1・2:小敷田 11号方形周溝墓 3:小敷田 SK203 4:小敷田 SK205 5・6:小敷田 4区河川跡
 7・8・10・14・16:小敷田 4区包含層 10・21・23:小敷田 SK152 11・17:小敷田 13号住居
 12・18・19・20:小敷田 18号住居 13:小敷田 16号住居 15:小敷田 5区河川跡 22:小敷田 SK166



第7図 小敷田周辺以外での小松式系統土器 (S=1/4)
 1:円山 13号住居 2・3:円山 4号溝 4:円山一括 5:前中西 1号河川跡
 6:小石川町(東京都文京区) グリッド 7:山ノ上(神奈川県厚木市) 3号竪穴住居

れる。21・22は壺口縁部で、いずれも受口状口縁の一部である。口縁部外面に矢羽状沈線を施し、20は刺突を施した貼付を縦位に伴う。吹上Ⅰ期新段階に類例がある（第9図1）。23は無頸壺の口縁部である。口縁下に一对の穿孔が認められ、その下に櫛描直線文、斜行短線文が続く。ほぼ同形・同構成の無頸壺が吹上遺跡で出土している（第9図11）。

②甕（10点10個体）（第8図7～16）

7は口縁が強く外反し、内外面に刷毛調整がある。口唇部は工具の刻みではなく、指圧によって波状に調整する。8も7と同様であるが、刷毛調整は内面下部に限られる。9はわずかに胴部が張るタイプで吹上Ⅰ期の中段階を思わせる（第9図11）、胴部文様帶下端は斜行短線文が2段施されている。10の斜行短線文は小さく変容し、斜行もしていない。11～16は北集落の甕とほぼ同形である。9・10はともに八日市地方様相8期に含まれるとされる（馬場2008）。

（4）村後遺跡出土遺物（第8図17）

口縁部から胴部にかけて、3段の櫛描直線文が巡る甕であるが、その間2段に、かなり変容した斜行短線文が施されている。甕のつくりも粗雑で、地文には繩文が施されている。

（5）円山遺跡出土遺物

①壺（3点）（第7図1～4）

1は頸部以上を欠く小壺で、2・3が胴部破片である。2・3が比較的斜行短線文らしさを保つのに対し、1は3本1単位の斜行短線文の施文が一定でなく、器形も小松式とは認め難い。4の器種は不明であるが、外反する口縁の一部であろう。内面の矢羽状沈線は、小松式に典型的である。

（6）その他（第7図5～7）

前中西遺跡では受口状口縁壺の口縁部が河川跡から出土している（第7図5）。矢羽状沈線を綾杉状に重ねた文様を口縁部外面に施し、その段部は指圧により波状を呈している。典型的な小松式

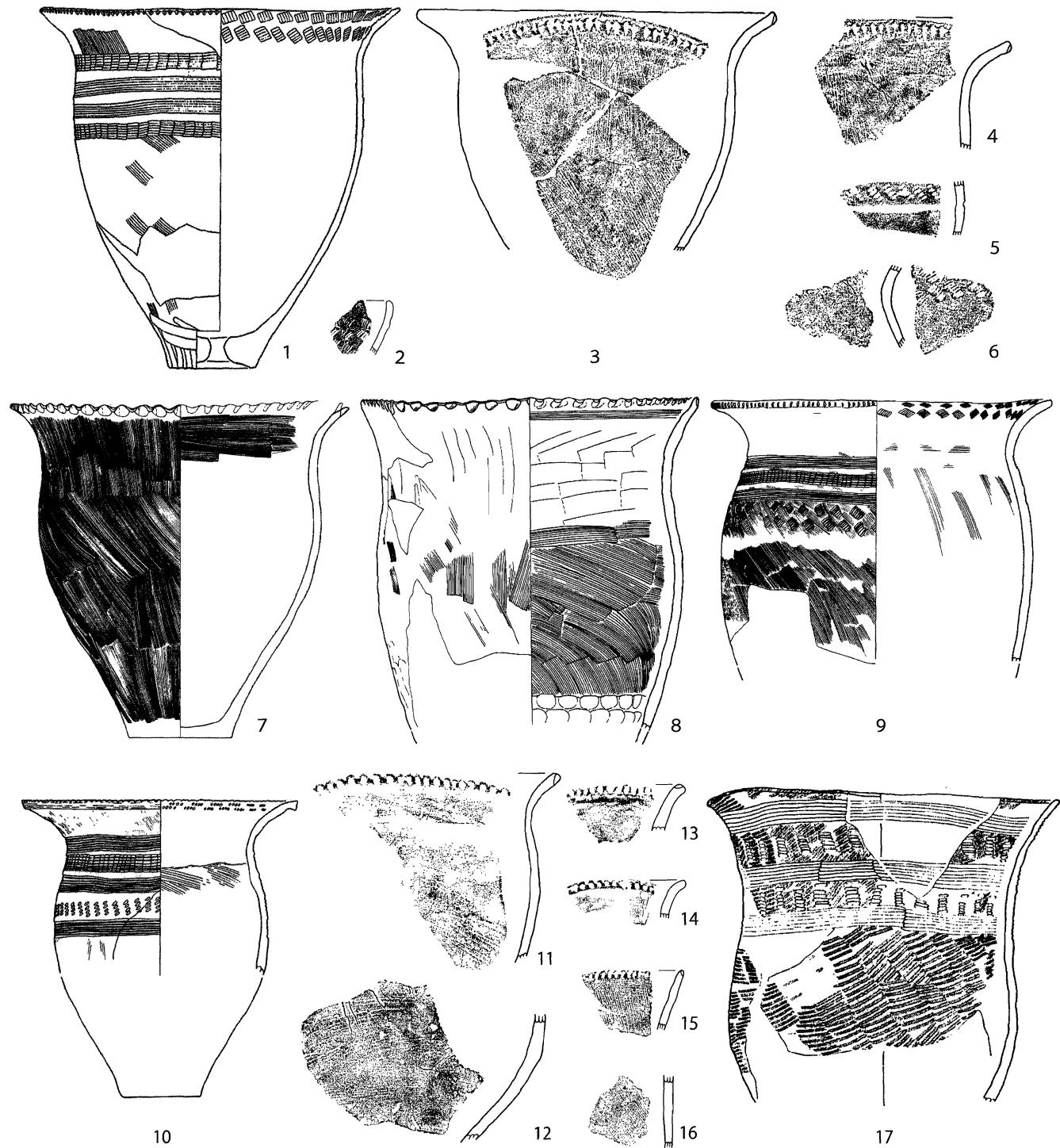
の受口状口縁壺とみられる。

6は東京都小石川町遺跡出土品である。壺胴部破片と思われる。櫛描直線文を3段配置し、その間に波状文を充填している。文様下端に斜行短線文を施文する。明瞭に確認できる斜行短線文は一段であるが、更に下にもう一段あるようにも見える。小型の斜行短線文は一見すると八日市地方様相8期の影響を思わせるが、久田正弘はこの遺物について、斜行短線文が「複帯構成の中で従文様である段階」であるとして小敷田の一群よりむしろ古くとらえている（久田1999）。櫛描波状文の粗雑さもその印象を与え、吹上Ⅰ期古段階を思わせる。また、当遺物については、在地系の土器胎土とは異なり搬入品の可能性もある。

7は神奈川県山ノ上遺跡の出土品である。胴部上半に最大径を持つ甕型土器とされている。地文に繩文を施し内面に刷毛調整が見られる。頸部は緩やかに外反しながら口縁部に至り、口唇部は外にそがれている。口縁部外面には3本1単位の斜行短線文が3段施されているが、簡略化が著しく、器形も小松式とは異なる。同じ3号竪穴住居からは栗林式系統とみられる土器が出土しているほか、 笹沢正史の談として「群馬県西部・埼玉県北西部の影響を強く受けているのではないか」と紹介しており、やや時代が下るかと思われる（大上1988）。

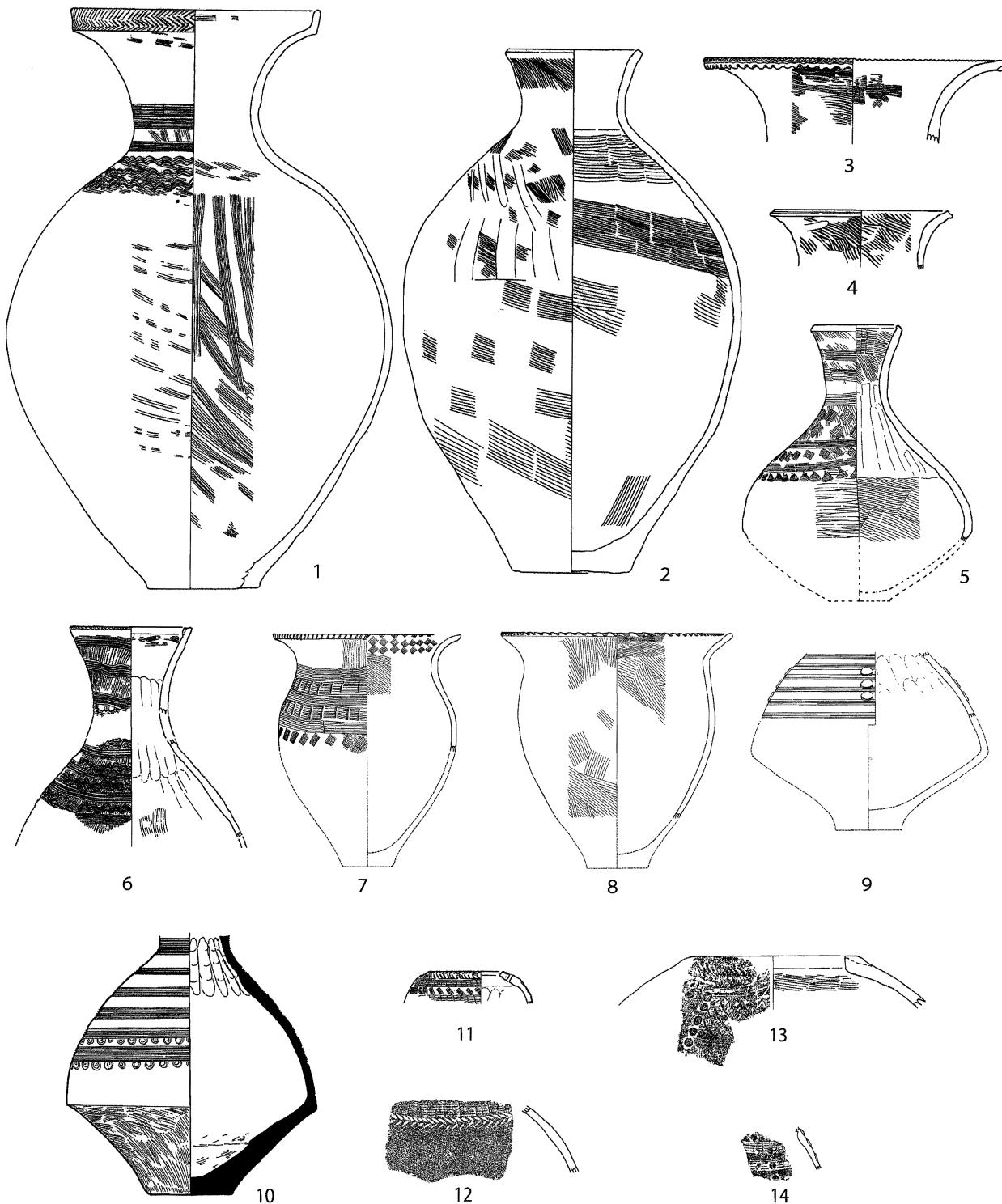
5.まとめ

以上、各遺跡と遺物について概観した。石川が指摘したとおり、小敷田南集落からの小松式土器の出土は突出して多い。また、明確に小松式と認められるものについては八日市地方8期、ないしは吹上Ⅰ期新段階に時期を限定できる点で、馬場の指摘におおむね沿うものである。そして、今回集成した土器（片）の中に八日市地方九期ないし吹上Ⅱ期以降の特徴を捉えることはできなかった。久田の言う北陸系集団の移住はきわめて短期間のうちにのみ起きたものであったのだろう。



第8図 埼玉県内出土の小松式系統甕 (S=1/4)

- 1:古宮 SK87 2:古宮 SK25 3～5:池上1号環濠 6:池上1号住居 7・14:小敷田4区河川跡
 8:小敷田5区河川跡 9:小敷田16号住居 10・13:小敷田18号住居 11:小敷田SK203
 12・16:小敷田SK191 15:小敷田SK190 17:村後グリッド一括



第9図 北陸の小松式土器 (S=1:4)

- 1:吹上Ⅰ 3号方形周溝墓 2:北小島 SD1 3・4:吹上Ⅰ SK315 5:吹上範囲確認 SX576 6:吹上Ⅰ旧河道
7:下谷地 SK83 8:下谷地4号住居 9:下谷地 SK93 10:梯川 11:吹上Ⅱ旧河道 12:吹上Ⅰ SK3
13:作道 SX26 14:吹上範囲確認 SK605

やや視点を広げると、熊谷市周辺では小松式土器はほとんど見られず、また模倣の精度は池上・小敷田遺跡を離れると急速に下がっていく。複数の遺跡・遺構から小松式土器が地域的に出土することは池上・小敷田遺跡周辺を離れるほど少なく、円山遺跡の小壺や山ノ上遺跡の甕型土器のような、簡略化した文様の一部が別系統の土器に加わる例が点在するのみとなる（第10図）。川を挟んだだけの古宮遺跡ですら簡略化の兆候は見られ始める。

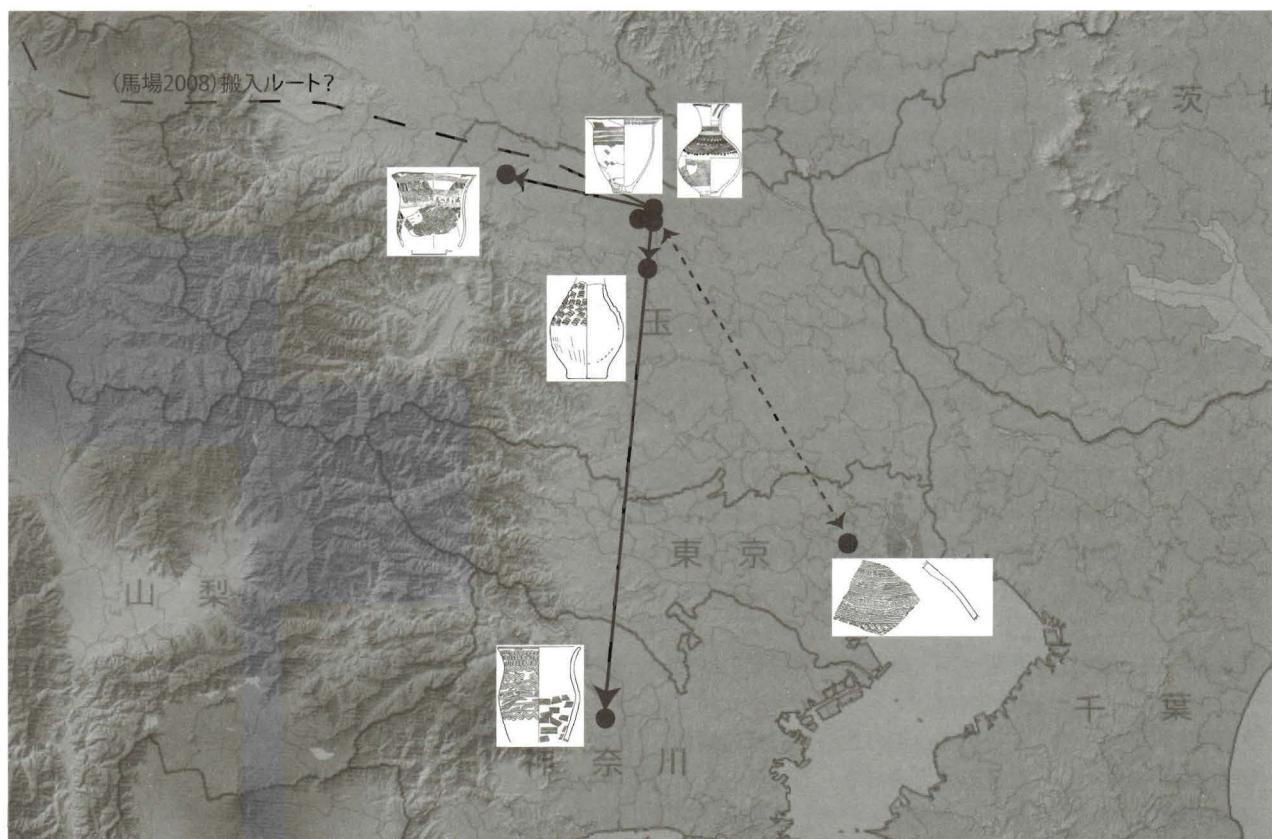
しかしこれは逆に、忠実な小松式の流入が短期間であったにも拘らず、小松式の文様がわずかながらもミーム（註3）として採用されている事例として評価しうる。流入がきわめて一時的なものであっても、北陸系統のミームが継承するに値するものとして周辺諸遺跡に捉えられている。

池上・小敷田・古宮遺跡に先述のような価値のあるものと捉えられた集団の移住を想定するとき、

立地の面も含めあえて直線的に想像をたくましくすれば、北陸から移住した小集団とは水田経営に関わる（ことを期待された）集団であったことが想像される。稲作技術の習得のために呼び寄せた、いわば技術者集団であったのではないか。池上・小敷田以外の遺跡の立地もそれを思わせる。

とはいっても、実際には、石製品は中部高地の様相を色濃く残すほか、西摂系サヌカイト製短剣（杉山2009）なども報告されており、北陸系統の石製品はほとんど目立たない。また、植物遺存体分析（吉田1991）によれば、明確に水田経営が確認されるのは古墳時代初頭を待たなければならない。

あるいは北陸系集団は水田経営のごく初期に先駆的に関わったのみであったのかもしれない。灌漑施設や水田が確認されるのは中期後半に入つてからで、前中西遺跡や北島遺跡の段階を待たなければならない。そこに見られるのは中部高地系の



この背景地図等データは国土地理院の電子国土Webシステムから提供されたものである

第10図 小松式系統土器の拡散

影響を強く受けた土器の一群であり、小松式系統の土器の姿は見ることができなくなるのである。

北陸系集団が果たした役割が何であったかについては、本稿では可能性の提示にとどめておきたい。しかし、今後その解明に際して、本稿の集成が一助となれば幸いである。

謝辞

本稿を執筆するにあたり小出輝雄氏をはじめ、埼玉県土器観会の方々にお世話になりました。殊に吉田稔氏には資料や遺跡情報のご教示等、多くの面でお世話になりました。また、本稿のきっかけ

けを授けてくださった石川県埋蔵文化財センターの皆様、そして久田正弘氏に深く感謝いたします。

註1 刷毛調整は埼玉県内の在地系土器では採用されることがなく、外来土器の重要な判定基準となりうる。

註2 ただし、第9図2は文様のない壺であり、時代も下り近畿IV様式2に併行するとされるので注意が必要（岡田2010）。

註3 生物的遺伝子geneに対して、これに依らず継承される要素である「文化的遺伝子」memeを指す。

引用参考文献

- 荒井 隆 2006 『市内遺跡調査概報X VI』高岡市埋蔵文化財調査概報第64冊 高岡市教育委員会
新井 端 2011 『円山遺跡』埼玉県熊谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第8集 埼玉県熊谷市教育委員会
石川日出志 2001 「関東地方弥生時代中期中葉の社会変動」『駿台史学』113号 pp.57-94 明治大学
大上周三 1988 『厚木市山ノ上遺跡I』神奈川県文化財調査報告書第47集 神奈川県教育委員会
岡田一広 2010 「特集・弥生時代前期・中期の遺跡『上北島遺跡』」「大境」第28号 富山考古学会
加藤元信 1994 『小石川町遺跡』文京区埋蔵文化財調査報告書第6集 文京区遺跡調査会
金三津英則・松尾洋次郎 2006 『作道遺跡発掘調査報告』射水市教育委員会
笛沢正史編 2006 『吹上遺跡』上越市教育委員会
笛沢正史編 2007 『吹上遺跡範囲確認調査報告書』上越市教育委員会
杉山浩平 2009 「埼玉県行田市小敷田遺跡出土のサヌカイト製打製石器について」『考古学雑誌』第93巻4号 pp.23-35,47 日本考古学会
鈴木正博 2013 (2002再録) 「関東弥生時代中期中葉の突起文と筒形土器の型式学」
『実践！パブリック・アーケオロジー』pp.197-201 馬場小室山遺跡に学ぶ市民フォーラム
鈴木孝之 2004 『古宮・中条条里・上河原』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第298集
関 義則 1986 「関東地方における弥生中期の現状(2)」
『第7回三県シンポジウム 東日本における中期後半の弥生土器』pp.25-33 北武藏古代文化研究会
高橋 保他 1979 『下谷地遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第19 新潟県教育委員会
中島 宏・杉崎茂樹 1984 『池守・池上』埼玉県教育委員会
野村忠司 2011 『吹上遺跡II』上越市教育委員会
橋本澄夫 1968 「石川県小松市八日市地方遺跡の調査」『石川考古学研究会会誌』11号 pp.1-19 石川考古学研究会
馬場伸一郎 2008 「弥生中期・栗林式土器編年の再構築と分布論的研究」『国立歴史民俗博物館研究報告』第145集 pp.101-174
久田正弘 1999 「弥生時代中期の北陸と長野の関係」『長野県考古学会誌』92号 pp.19-30 長野県考古学会
福海貴子 2003 『八日市地方遺跡I』石川県小松市教育委員会
細田 勝 1984 『向田・権現塚・村後』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第38集
松田 哲 2011 『前中西遺跡VI』埼玉県熊谷市埋蔵文化財発掘調査報告書第9集 熊谷市教育委員会
吉田 稔 1991 『小敷田遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第95集